

善養寺便り

第九号

平成二十八年四月号 発行 善養寺

四月のことば

自分の足りないところを 見るのもよいが
自分にあるものを 見ていこう
それは 自分を大切にすることになる

◆「京都女子大学女声合唱団」善養寺演奏会

二月十三日（土）午後一時半より、当山本堂にて京都女子大学女声合唱団演奏会が開催されました。当合唱団の、兵庫県演奏旅行の最終日として善養寺で演奏したのです。尼崎、神戸別院での演奏会に続き、前日から姫路に宿泊し、当日十時ごろには善養寺に到着して、本堂で声出しやリハーサルを行いました。

この日は午後からあいにくの雨でしたが、門信徒の方のみならず、近隣の合唱好きの方、地域のお寺の方などで本堂が満堂になりました。はるばる神戸や宍粟市から京女大女声合唱団の卒業生の方が来て下さったのには驚きました。

演奏は「音楽礼拝」に始まり、仏教聖歌や愛唱歌の他、皆さんと一緒に「365日の紙飛行機」なども歌いました。

京女大女声合唱団の笑顔と清らかでさわやかなハーモニーが

◆仏教婦人会平成二十七年第五回仏教講演会

三月九日（水）は午後一時半より善養寺仏教婦人会二十七年第五回仏教講演会でした。京女演奏会に続き、今回もまた非情な冷たい雨模様でしたので、ややお聴聞の足は鈍かったように思います。しかし、そんな中でも今年度講演会皆勤の方など多くの方がお越しくださいました。

ご講師は、昨年十二月（第四回）に引き続き、本願寺派布教使の安方哲爾先生（貝塚市）です。安方先生のご法話はいつもとてもわかりやすく、味わい深く、皆さまに大変好評です。

ご法話（お説教）は、通常「讀題」と言って、その時の法話のテーマを示す言葉で始まります。今回安方先生は『本願力にあひぬれば むなくすくするひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし』

という親鸞聖人の「高僧和讃」の一首を讀題として示されました。

「本願力」とは何でしょうか。

「本願力に遇う」ことでなぜ「むなくすく（人生を）過ごすことがなくなるのでしょうか。そんな問いかけが今回のご法話の中心



善養寺の本堂に響きわたり、途中には、善養寺コーラスも賛助出演し、歌う方も聴く方も大変楽しく素晴らしい演奏会となりました。合唱団の皆さんも大変満足してお帰りでした。何年後かにまた善養寺に来てほしいものです。

なお、演奏会の様子を善養寺ホームページで見ることが出来ます。



善養寺ホームページ
どうぞご覧ください。

姫路 善養寺で
検索

でした。

「本願力」とは文字通り「阿弥陀様の本願（願い）の力」です。仏様の本願力は「ナマンダブツ」の言葉となって私に働きかけて下さり、「南無阿弥陀仏」と私が称えることは、私が阿弥陀様そのものにお出逢いさせていただく人生となつて、むなく感じた人生が変わつてゆくのです。

私たちの人生は、苦しみの連続です。誰も人知れず悩みや苦しみを抱えて生きていかねばなりません。そんな苦しい人生はむなしだけだ、と思つて日々を生きているのか、苦しみの毎日の中でも南無阿弥陀仏と称え、仏様に出会つて過ごすかで人生のとらえ方はかわつてくるのではないのでしょうか。お念仏に出会う人生は「生まれ、生かされ、生きていく」意味に込める人生になるのです。

先の和讃の現代語訳は次の通りです。
「本願のはたらきにあつたならば、もはやいたずらに迷いの生死を過ごす人はない。宝の海のような功德が身に満ちみちて、私たちの煩惱の濁水も往生成仏の妨げになることはない。」



私たちはなぜ生まれ、苦しみつつ生きてゆくのか。一見非常に恵まれた人生の方もあるでしょう。反対に、経済的に困窮したり、病気や事故に突然遭遇する人生もあります。「神も仏もない」と言いたいような境遇ならば仏法は届く余地はないのでしょうか。今私たちは、こうして仏法に遇いました。仏法に遇つたことは、確かに浄土へまいらせていただく身となつたということです。そしてこの仏縁を喜ぶ人生となるはずなのです。

◆すみれの会より

二月十日「すみれの会」では門信徒の鎌田節子様のご指導により「ひな人形作り」に挑戦しました。美しい色とりどりのハギレの中から、思い思いの襟や着物を選び着せると、世界でたった一つの自分だけのおひな様に全員が大満足でした。

三月二日は前回に続いて鎌田様のご指導で「五月人形作り」をしました。ひな人形で多少は慣れていたのか、皆さん素敵な五月人形をお作りでした。

「すみれの会」では、参加者と講師も募集中です。創作でも料理でも、その他こんなこと面白いよ！誰にでもできますよ。というようなことがあれば一度お寺に連絡してみてください。



九月 特別企画のご案内

近年、当山の法座は参加者が女性ばかりで、しかも参加される方も決まってきており、参加数も横ばい状態が続いています。納骨堂やお墓には参るが、お寺の法要や法座にはあまり参らないという方もいらっしゃいます。

当山では法要法座がほとんど平日ですので、それも影響していると思いますが、もっとお参りが増えてほしいと念じております。

そこで、まずはお寺に来ていただこうと思い、今年次のような企画を立てました。どうか一人でも多くの方にお寺に来ていただきたいと思えます。

平成二十八年九月二十四日(土) 善養寺「おてらくご」の会を催します。

九月二十四日(土) 開演十四時(予定)

「桂雀々」さん

落語会をします。

桂雀々さんが

善養寺に来ます！

九月二十四日、皆さん是非空けておいてください。演目は未定です。



◆平成二十八年度

行事予定

四月二十一日(木)

二十二日(金)

「永代経法要」



講師 野村康治先生(大阪市)

別紙にて案内の通り、右記の日程で、本年度「永代経法要」を勤めます。今年、年忌の家の方はもちろん、他の皆さんもどうぞお参りください。ご講師は本願寺派布教使として全国各地でご活躍の野村康治先生に初めてご縁をいただきました。どうぞご期待ください。

五月二十七日(金)

「仏教婦人会総会並びに第一回仏教講演会」

講師 藤澤めぐみ先生(京都市)

ゲスト 國見政之輔(尺八) 西川かおり(琴)

七月十二日(火)

「第二回仏教講演会」講師 谷川弘顕先生(神戸市)



十一月一日(火) 二日(水)

「報恩講法要」講師 深 英俊先生(京都市)

十二月十三日(火)

「第三回仏教講演会」講師 谷川弘顕先生

二十九年三月八日(水)

「第四回仏教講演会」講師 安方哲爾先生(貝塚市)

◆過去帳に見るヒストリー・オブ・善養寺⑤

(今回は第十四世住職までの掲載でした。)

十四世 要善院釋了願法師(明治三十年 一八九七年没)

大正元年十二月朝九時、本堂の裏部屋より出火。折柄の強い西風により本堂は瞬く間に全焼。以来再建まで十年を要す。

十五世 浄善院釋明俊(大正八年一九一九年没 享年二三)

十四世死去の後、無住状態になり、本堂再建に向け十年間も寺族、門信徒の労苦が続いた。本堂再建までの十年間の辛苦は、とても想像できない。ただただ敬服するばかりだ。

大正十年五月(一九二一年)本堂の再建完成し、入仏式厳修。

十六世 諦善院釋尼明尚(昭和四年一九二九年)死去。

俗名、江尻尚尾 十四世了願師の二女で、尚尾息子十五世死去後住職に就任。住職就任までは小学校教員として奉職。

なお、住職就任前に婿養子を迎えたが、やがて離縁し、元夫は北海道美唄に寺院を建立した。「北海道空知南組浄土真宗本願寺派正教寺」現住職は第三世で、現在も当山と交流がある。尚尾さんはむろん現住職の祖母温子の母である。また、十六世死去の年(昭和四年)に前任職十八世茂が誕生。